命の選別

群馬県立中央中等教育学校
三年　相原　珠貴

今、目の前で、幼い子供をもつ働き盛りの四十代と、八十代の患者が二人とも人工呼吸器を必要としている。しかし呼吸器はもう１台しかない。決断をせまられる、正解のない問題だ。私は選ぶことが出来るのだろうか？

四月のネットニュースで、大阪府が、高齢者の入院の優先順位を下げざるをえない、とする文章を発信した。とうとうこの日本でも命の選別が始まったのか。

一年前、コロナの影響で休校になっていた頃、イタリアでは高齢者に対する治療を断念する、というニュースをみて衝撃をうけた。人の命の価値に優劣がつけられたのだ。それが今や日本で起こっている。恐怖を感じて声が出なかった。基本的人権が尊重され、医療保険が完備され、誰でも希望する医療を受けるのが当たり前となっている、今のこの日本で、人の命が選別される。普通であれば全くありえないことだ。

今、私が命の選別を迫られたら？　いや、今は選べない。どちらを選ぶべきか、今の私には決められない。この質問を医師である母にしてみた。「普通ならどちらの命も大切だよね。でも決められずに迷っていたら両方の命が失われてしまうかもしれない。そのときが来たら、誰の指示でもなく、自分の責任で決めるんだろうな。」と母は答えた。そのとき、以前見たマイケル・サンデルの正義についての講義を思い出した。四人が難破したが、そのうちの１人の少年を殺し、他の三人は彼の肉を食べて生還した。殺された少年は孤児で、他の三人には海水を飲んだために体調を崩していた。三人がしたことは許されるのか、という議論だった。一人が死んで三人が生き延びることは、三人全員が死ぬよりもよりよい選択だったのだろうか。状況は違うが、命の選別という点では、人工呼吸器の選択と同じだと思った。彼の講義になぞれば、幸福の最大化という点で、幼い子供をもつ働き盛りの四十代の人を生かす方が、より社会のた

めになる、という考え方がある。一方で、犯すことのできない普遍的人権として、命の重さに違いはない、という考え方もある。自分が選択をするということは、その選択に対する責任が伴う。今までの日本の常識から考えれば、全ての命の重さは同じである、というのが答えだろう。しかし今コロナの影響で、常識が通用しない場合が現実にはあるということだ。

今回のコロナ禍で私の生活も一変していた。十二月に突然両親と離れて姉と暮らすことになった。両親の勤務先でコロナ感染症の患者がでたためだ。私たちが学校に通い続けるために仕方のない選択だった。今までやってもらって当たり前だった食事の準備など、自分たちでやるしかなかった。色々な人に助けられたが、結局は姉と二人だけだった。夜電話で両親と話し、寂しくて泣いたこともある。相談したくてもこれまでは当たり前にそばにいた両親がいない。最初はコロナを、両親から離れなければいけないこの状況を生み出したすべてを憎んだ。しかし、憎んでも何も変わらない。前を向くしかなかった。毎日必死だった。不安だらけだったが、自分たちで考えてここまで過ごしてきた。時間がたってみれば、すこしはたくましくなった自分がいると思う。

今回、両親から離れて過ごした時間を経て、自分の言動に責任をもつことを強く意識するようになった。今までは選択をするとき、望ましい選択肢が明らかであることがほとんどだった。まだ自立していないため自分で責任を負うことも少なかった。しかし、いつかは正解のない選択を自分でしなければいけない時が来ると思う。そのときのために、まずは自分の本当の気持ちを自分で明確にして、普段から自分の言動に責任をもち、行動していきたい。多様な価値観があることを受け入れて、尊重していきたい。いろいろなことを学ぶことに常に一生懸命でありたい。そして人間性を高めていきたい。

私は将来医者になりたい。まさに、命の選別を迫られる時がくるかもしれない。そのときには、目の前の現実としっかり向きあい、自分の力で、自分の意志で選択できる強い人間でありたい。